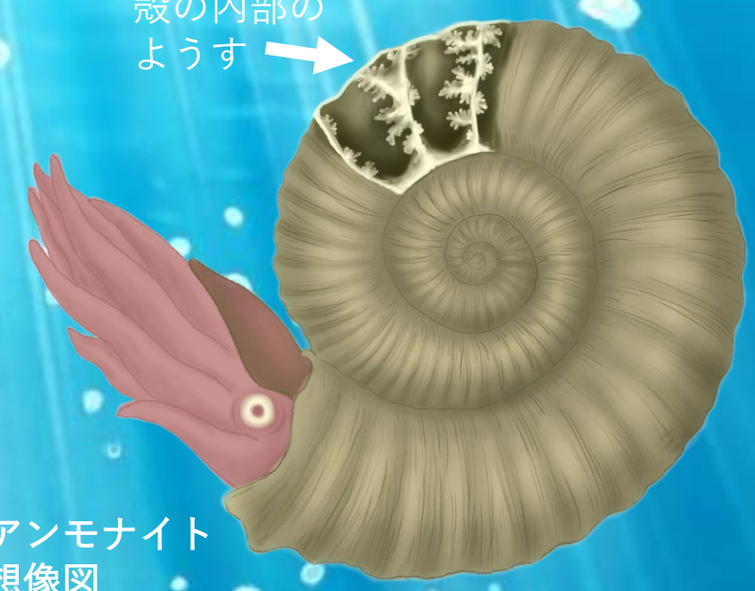
アンモナイト
ammonite

はじめに

アンモナイトは，古生代中期のデボン紀から中生代白亜紀末の海洋に生息していた頭足類の仲間です。世界中の地層から発見されており，たくさんの種類が知られています。日本にもアンモナイトの産地がたくさんあります。特に，北海道中央部に分布するエゾ層群とよばれる白亜紀の地層は，アンモナイトの化石が多産することで有名です。



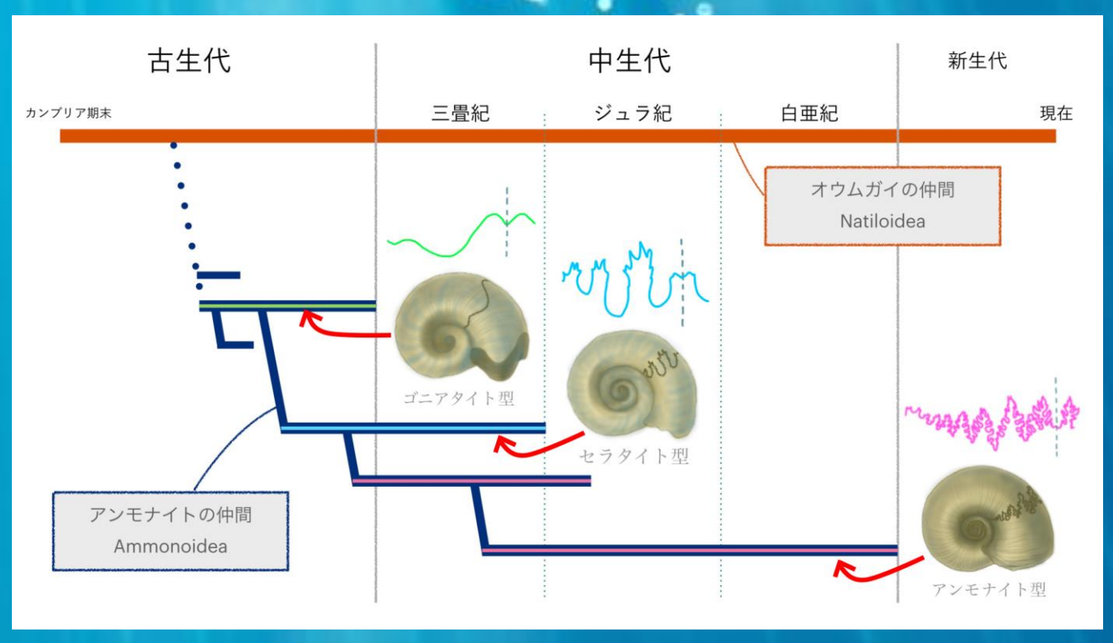
アンモナイト
想像図

殻の構造

アンモナイトの平らに巻いた殻は，巻貝と異なり内部には仕切りがあって，いくつかの部屋に分かれています。殻は身を守るために重要な器官ですが，体を入れることができるのは一番外側の部屋だけです。奥の部屋は空洞で，ガスや液体をこの中に出したり入れたりして浮力の調節をしていたと考えられています。

アンモナイトの縫合線

アンモナイトの化石の殻の表面がはがれて内側が見えている状態になると，部屋の間の仕切り板が殻と接合している部分に模様が現れます。この模様は縫合線とよばれています。古生代のアンモナイトの縫合線は単純な形ですが，白亜紀には非常に複雑な模様を持つものが現れます。縫合線の模様は，アンモナイトを分類するときにも利用されています。



縫合線

異常巻アンモナイト

アンモナイトといえば，普通は平らに巻いた形を思い浮かべるでしょう。しかし，巻がほどけてらせん状になったもの，折りたたまれたような形のもの，一見紐がもつれているような複雑な形をもつものなど異常な形をした種類があります。このようなアンモナイトを総称して「異常巻アンモナイト」とよんでいます。かつては，奇形とみなされていたり，絶滅に向かう異常な形質とみなされたりした時期もありました。しかし，いまでは，これらの「異常巻」は異常なものではなく，様々な環境に適応した結果，このような形をとるようになったことが判っています。

ニッポニーテス
想像図

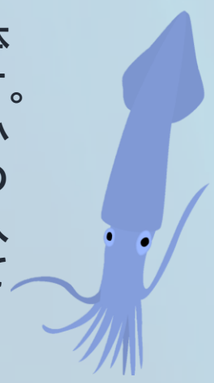
現生の頭足類いろいろ

頭足類は軟体動物の一種で，頭の前方に足がつき，後方にお腹（内蔵を収めた部分）がついています。現生の頭足類は，オウムガイ，イカ，タコに大分類されます。

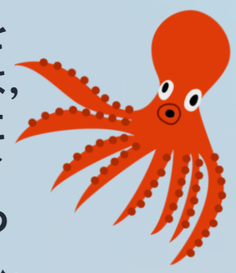
オウムガイ：アンモナイトよりも昔に出現し，現在も西太平洋の暖かい海の深い場所に生息しています。殻の開口部を下側にして，たくさんの触腕を前方に突き出しています。タコやイカのような吸盤はついていません。オウムガイとアンモナイトの殻のつくりは大変よく似ています。生きているときのアンモナイトの想像図は，オウムガイの生態を観察して描かれたものでしょう。

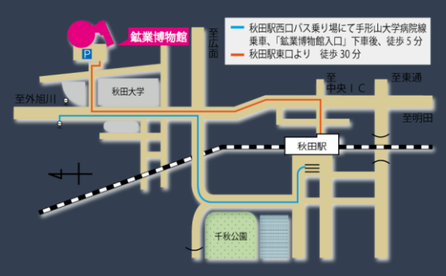
オウムガイ(鳥羽水族館提供)

イカ：イカの仲間は，体の内部に体を支えるための軟甲や甲を持ちます。トグロコウイカの甲は，平巻きで小部屋に分かれておりアンモナイトの殻に似ていますが，体をその中に入れるのではなく，体内に収められています。



タコ：ほとんどの種類は硬い部分を持ちませんが，アオイガイの仲間は，アンモナイトに似た平巻きの殻に入って浮遊生活をしているのでカイダコともよばれています。殻をもつのは雌だけで雄には殻がありません。



秋田大学大学院国際資源学研究科附属
鉱業博物館

開館時間■ 9：00～16：00
休館日■ 年末年始（12/26～1/5）
入館料■ 大人100円、高校生以下無料